

# 越境する学び

## ——大学院における全学教育

奥本素子 総合研究大学院大学助教 全学事業推進室

### 越境する学び

大学院とは、文献を読み、実験をし、調査をし、論文を書くだけの場であろうか。大学院における学びとは、ただ単に研究者としての技術を磨き、成果を出すことのみが求められているのであろうか。大学院では従来、研究室という社会の中で徒弟制的に教育が行われてきたが、それらはたこぼ型研究者を生み出す原因とも指摘されている。

学習とは知識や技術を獲得するだけでなく、自分の生きる社会の価値観や文化を吸収し、自己のアイデンティティを確立する活動でもある。特に、個人の成長をめざす学習活動の場合、学習は社会的活動を通して達成されると考えられている。そこで、総研大では各専攻で高度に専門的な研究者養成教育を実施するとともに、専攻や研究科をこえた「全学教育」によって学際性や総合性をもった研究者の育成を進めている。

今日、多くの研究課題が複雑になってきており、一分野の研究知見だけで問題を解決するのは容易でない。そこで、たとえば環境問題のように、他分野の研究者と協力した共同研究や、複数の領域にまたがった文理融合を含む学際研究の重要性が認識されている。このような動向を受けて、教育もまた変化していく必要がある。

教育の分野では、他分野との交流によって生まれる学習は、「越境する学び」と呼ばれ、その効果については、すでに多くの知見が出されている。多様なバックグラウンドをもった集団のほうが創造性が高く、新奇なアイデアが生まれやすい。また、他分野の人との交流体験が自己の領域の振り返りを促し、結果的に自己の専門家としてのアイデンティティの確立にもつながることが報告されている。さらに、自分より知識が不足している人

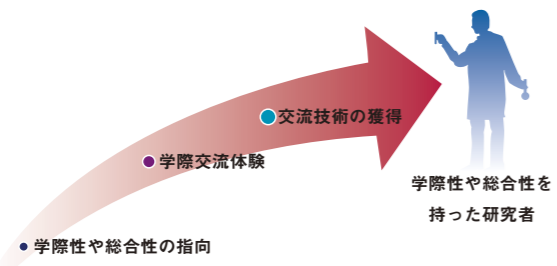


図1 全学教育としての学際性・総合性育成モデル

に説明することで、問題が整理され、理解が深まると言われている。

### 総研大における全学教育

総研大の全学的な学際交流体験は、まさに越境する学びを体験するために開催されている。しかし、越境体験にはさまざまな工夫が必要であることも指摘されている。研究者の例に当てはめると、研究者が抱えている研究における価値観、用語、道具、そのすべてはその研究者が属している研究者コミュニティの中にある。他分野の研究者はその文脈を理解しないため、意思の疎通が困難になってくる。分野を越境し、たがいに交流するためには、越境体験への動機づけ、対立する関心の調整、他者を理解し、自分を理解してもらう努力、といった能力が必要となってくる。それら越境のための能力は、経験によって培われると考えられているが、大学院生にとって越境体験が頻繁にあるわけではない。

そこで、全学教育では段階的な全学事業を通じて、学生の越境体験を促し、そこでの学びを支援している(図1)。

まず新生に学生セミナーに参加させ、その後、学生セミナー実行委員として学生セミナーを企画運営させることにより、学際交流への動機づけを高める。その後、英語プレゼンテーション等のレクチャーで、実践的な交流技術を獲得させる。そして全学的な学際交流事業を実施し、学生がその体験を通して越境を体験し、経験的に学べる機会を提供している。2009年度に行った全学教育は、図1のモデルに当てはめると、下記のように教育対象と目的が整理される(図2)。

### 全学教育の評価

全学教育の効果については、文化科学研究科の学生を対象に行ったインタビュー調査(7名)と質問紙調査(54名:回答率47%)から、検証した。まず、学生へのインタビューによって、学生が越境体験にどのような動機で参加し、そこから何を学んだかを調査した。その結果、学生の越境体験による学びは図3のようにモデル化できた。

学生は学際交流を博士研究とは切り離して考えており、そのためテーマが設定された専門的な交流ではなく、

軽い学際交流を求めていることがわかった。さらに学際交流参加のきっかけとして、強力な動機づけに「委員としての参加」「個人的つながり」があり、学生セミナー実行委員等の委員経験が、その後の学際交流体験に参加を強く推進していることが明らかになった。一方で、脆弱な動機づけにおいても、「経験からの興味」があげられ、何らかの経験がなければ、学際交流へ参加しようという動機にはなりえないことがわかった。また、分野横断型の学際交流における学生の越境、体験の結果は「体験不足」「成功体験」「失敗体験」に分類された。成功体験は越境によって体験の効果が上がったことを学生が実感している場合であるが、失敗体験においても、その後、改善・工夫を見いだすことにより、成功体験につながることが明らかになった。逆に、ポスターの前に誰も来てくれなかった、参加しただけで対話をしなかった、という体験不足の場合は、越境体験の効果は見られなかった。

インタビュー調査の分析を検証するため、質問紙調査により定量的に調査をした(図4)。その結果、学生は委員経験を通じて、学生間のネットワークを形成し、それがその後の学際交流事業の参加の動機づけにつながっていることが明らかになった。さらに経験によって、学生は改善点の自覚やプレゼン構成などを具体的に学んでおり、学際交流を実際に経験することの重要性も自覚していた。また、学際交流体験の効果として、学際交流に対する不安軽減や、他者との対話による新しい視点の獲得があることもわかった。

上記の調査により、全学教育が提供してきた学生セミナーや学際交流事業が、学生の学びに寄与していること、特に、パス解析(図4)では越境である学際交流体験を通して、学生は「他分野の学生(教員)と交流し、自分の研究を発展させる新たな視点を得た経験をもつ」ことが明らかになった。つまり、「越境体験」が研究者としての成長に必要なことを証明したことになる。今後は、総研大の全学教育の効果も、より多角的に検証することで、研究者としての成長にどのように寄与したのかを具体的に分析し、学生や教員に全学教育の目的と意義を明確に伝えたいと考えている。そうすることで、効率的に学生が全学教育に参加し、研究者へのステップをうまく踏んでいける仕組み作りができていくものと確信している。

	1年	2年	3年	4年	5年
学生セミナー*	■				
総研大学術交流会*			■		
日本文化指導コース*		■			
【アジア冬の学校】		■			
【銀河系とダークマター】			■		
【スチューデント・イニシアチブ事業(全体事業)】		■			
【スチューデント・イニシアチブ事業(派遣事業)】			■		
【国際的プレゼンテーション能力強化プログラム】			■		
【生命科学・先端科学研究科合同セミナー】		■			
【e-learningを用いた複合的遠隔・直接教育による全学的英語教育の実証実験】		■			
【Quarterly Student Magazine】			■		
【SOKENDAI Cultural & educational Outreach Programme(SCOPE)】			■		
【総研大ワークショップ】			■		
【日本歴史研究の方法C-博物館とは何だろう-】			■		
【プレゼンテーションセミナー】			■		
【2009年総研大レクチャー:英語による研究交流】			■		
【第4回宇宙論・素粒子・弦理論に関するアジア冬の学校】			■		
【国際シンポジウム・総研大学術ネットワーク構築】			■		

■ 学際性や総合性への指向 ■ 学際交流体験 ■ 交流技術の獲得

図2 全学教育の目標と対象チャート図(全学事業推進室が行った事業(\*),専攻,研究科をこえて行っている学内応募型事業【】)

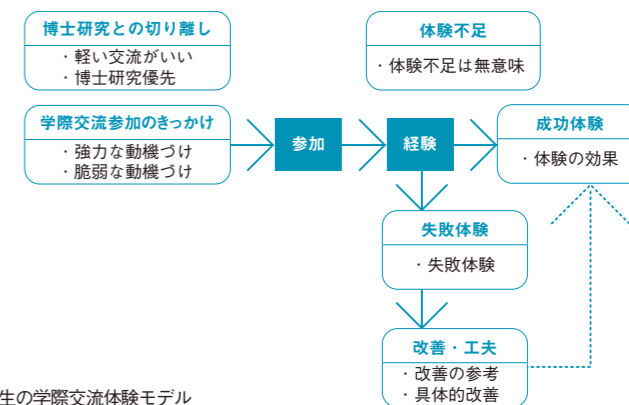


図3 学生の学際交流体験モデル

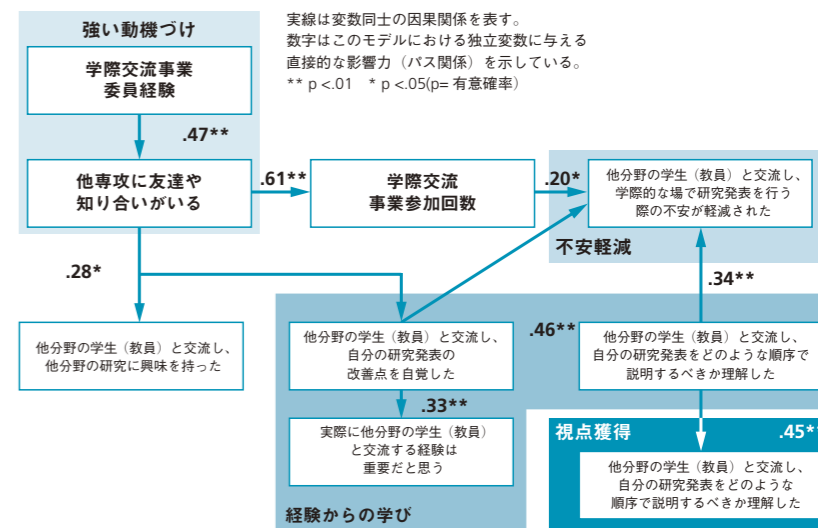


図4 パス解析による学際交流参加過程モデル(N=54)